

令和4年度

行政政策学類

編入学・学士入学試験

小論文

時間 90 分

注意事項

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開いてはいけません。
2. 問題冊子はこの表紙を除いて **8** 枚、解答用紙は **1** 枚です。
印刷不鮮明の箇所などがあれば、監督者に申し出て下さい。
3. 解答用紙の指定欄には、必ず受験番号を記入して下さい。
4. 解答は、別紙の解答用紙の解答欄に横書きで記入して下さい。
5. 解答用紙は持ち帰らないで下さい。なお、問題冊子と下書き用紙は持ち帰って
構いません。

<資料>は、宇野重規『民主主義のつくり方』（筑摩書房，2013年）の一部である。これを読んで、以下の問いに答えなさい。

- (1) 筆者は、傍線部①のような状況が生じた背景をどのように説明しているか、200字以内で要約しなさい。
- (2) 筆者は、傍線部②をどのように説明しているか、300字以内で要約しなさい。
- (3) 傍線部③によって政治や社会にどのような変化をもたらされたのか、について筆者の説明を要約したうえで、現代の政治状況や社会問題と関わらせながらあなたの意見を700字以内で述べなさい。

（問題作成の都合上、一部の原注を省略した。また出題者注を追加した。）

（注意）

解答にあたっては、解答用紙の1マスを1字に使い、句読点、引用符、括弧などはいずれも1字として扱うこと。ただし、算用数字及びアルファベットは1マス2字とする。書き出し及び行を改めたときは、1マス空けること。

独特な人間像

いつの頃からか、政治において語られる個人のイメージは、かなり独特なものになったようだ。例えば、現代アメリカの政治哲学を代表する理論家であるジョン・ロールズの議論をみてみよう。『正義論』（一九七一年）において、ロールズは「原初状態」という仮想的な設定を用いている。「原初状態」とは、近代社会契約論に出てくる「自然状態」論の現代版であるが、要は、正義の原則を抽出するにあたって、一人ひとりの個人に、とりあえずゼロの状態から考えてもらうための理論的な仕掛けであろう。

面白いのは、ここで「無知のヴェール」という議論が登場することだ。ロールズによれば、この「無知のヴェール」によって、人々は自分の社会的な属性がわからなくなる。性別や年齢、職業や収入、国籍やエスニシティなど、自分が社会のなかで具体的にどのような位置を占めているのかを示す情報が、本人に一切遮断されてしまうのである。社会のルールを決めるにあたって、自分についての具体的な情報があると、どうしても人は公平になれない。そうだとすれば、いつたんすべてを括弧に入れてしまえ、というのがロールズのねらいである。

あくまで理論的な設定であるといえ、それまでである。とはいえ、ロールズはさらに、そのような個人は他者への関心を一切もたず、それゆえに何ら嫉妬の感情をおぼえないという。そこまでいわれると、この仮想はかなり極端な人間イメージに基づいているのではないかという気がしてくる。

ロールズ的な個人は、自らの属性を知らず、他者にも関心をもたない。そのような個人が他者との対話抜きに、自分のなかで、自己利益を最大化すべく計算を行う。結果として、正義の原則が導き出されるわけだが、逆にいえば、そこまでしないと正義についての合意は得られないとロールズが考えていることがわかる。

このようなロールズの『正義論』はいささか極端なものかもしれない。とはいえ、およそ近代の政治思想は、人と人が合意するということに関して、かなり慎重な姿勢をとっていることは間違いない。言い換えれば、よほど特別な条件の下でなければ、政治において合意が成り立つことはありえないという前提が共有されている。

これほどまでに合意が困難視された背景には、これまでも言及したように、ヨーロッパが経験した宗教内乱がある。そこでは、宗教上の意見の対立が、即座に政治的対立の源になり、

場合によっては、血で血を洗う殺し合いにつながった。

中世ヨーロッパでは、強力な政治的統一を欠いたがゆえに、むしろキリスト教が社会の基盤を支えてきた。そのようなヨーロッパであったからこそ、宗教改革によってもたらされた宗教的対立は、ただちに社会の亀裂や分裂の直接的なきっかけとなったのである。

この宗教内乱を終息させるにあたって、政治の実務家たちは、なるべく宗教問題を表に出さないことが、秩序を実現するにあたっての鍵であることに気がついた。理論家たちもまた、己の信じるところは内に秘めたまま、秩序の確立それ自体を目的として判断し、行動する人間像を用意したのである。

結果として、肝心なことは外に出さず、かなり狭いチャンネルでのみ他人と意思疎通をはかる人間のあり方が、いつの間にか政治の基本前提になってしまった。それにしても、自分を示すことを恐れ、他者とコミュニケーションをはかることに極度に消極的な人間とは、いったいどのような人間なのだろうか。

「緩衝材で覆われた自己」

このような近代政治思想の人間像に、興味深い表現を与えた一人に、カナダの政治理論家チャールズ・テイラーがいる。テイラーといえば、コミュニタリアンと呼ばれる一群のロールズ批判者の一人として知られる。

コミュニタリアンにいわせれば、ロールズに代表されるリベタリストが前提とする抽象的な個人像には、大きな問題がある。あらゆる社会的属性を奪われた個人など、皮をすべて剥いたタマネギのようであり、何も残らない。これに対しコミュニタリアンはむしろ、コミュニティと結びついた人間の具体的なあり方を強調した。

テイラーはその後、多文化社会についても積極的に論じるようになる。フランス系住民を多数抱えるカナダのケベック州の出身であることを考えれば、自然なことであつたかもしれない。とはいえ、言語を通じてつねに自己解釈を続ける存在として人間を捉えるテイラーにとって、言語を中心に多文化主義を擁護することは、その人間観の当然の帰結でもあつた。

さらにその後のテイラーは、近代における「世俗化」という大問題にも取り組んでいる。マックス・ウェーバーを持ち出すまでもなく、近代化とは「世界の脱魔術化」であり、宗教的なものの後退として特徴づけられる、という理解はいまだに根強い。これに対してテイラーは、近代社会においてもなお、個人にとつての宗教の意味はなくなっていないと主張する。

自身がカトリック信者でもあるテイラーは、世俗化とは脱宗教化であるという理解に異議を申し立てる。その著作『今日の宗教の諸相』（二〇〇二年）において、テイラーはウィリアム・ジェームズの議論を援用しつつ、現代社会における宗教的なもののあり方を分析した。

テイラーはさらに、自らの宗教論を『世俗の時代』(二〇〇七年)という大著にまとめているが、この本のなかで、彼は面白い表現を使って、近代における人間像の変化を説明している。それがすなわち「緩衝材で覆われた自己 (buffered self)」である。物と物との間にあって、両者の衝突を食い止めるものをバッファ― (緩衝材) というが、あたかもバッファ―によって覆われたかのような個人のあり方を、テイラーはそう呼んだのである。

テイラーはこれまでも、さまざまな人間像を示してきた。代表的なのは、「遊離した自己 (disengaged self)」であろう。リベラリズムが想定するような、多様な社会的つながりから解放された自己とは、同時に、何ごとにも関与しない「遊離した自己」でもある。このような人間像は、マイケル・サンデルのいう「負荷なき自己 (unencumbered self)」とともに、コミュニタリアンが批判する代表的な人間像とされてきた。

しかしながら、テイラーが『世俗の時代』で展開する「緩衝材で覆われた自己」とは、それ以前のものとは若干ニュアンスが異なっている。問題は、自己の内と外との関係にある。私の内と外とは、どのように隔てられているのか。そもそも人間に、内と外の境界線など存在するのか。そのこと自体を問うために登場したのが、この表現である。

「緩衝材で覆われた自己」と対比されるのは、「孔^{あな}だらけの自己 (porous self)」である。たしかに人間の身体には、いくつもの孔があがたれている。口や耳や鼻、あるいは肛門、さらには皮膚に無数に拡がる汗腺などを通じて、いろいろな物質が人間を出入りする。ある意味で、人間の内と外とは、皮膚という境界線によって限界を画されつつも、このような無数の孔の存在によって、事実上半透過の状態になっているといえる。

テイラーのいう「孔だらけの自己」とはもちろん、そのような物理的な意味での「孔」ではないだろう。彼のいう「孔」とは、一つのメタファーに過ぎない。肝心なのは、外部からの影響がただちに自分のなかに浸透してくることである。「孔」があれば、どうしても外から何かが入ってくるし、自分からも抜け出てしまう。その意味で、「孔だらけの自己」とは、外からの影響を受けやすい、ヴァルネラブルな (脆弱で、傷つきやすい) 存在なのである。

外からの影響といった場合、テイラーがとくに注目するのは、いうまでもなく精神的な影響である。「孔だらけの自己」にとって、自分の外に何かしら強力かつ重要な精神的存在があり、自らの精神もまた、その影響を受けやすく感じられる。神や精霊の存在は、そのわかりやすい例であろう。神の「お告げ」はただちに自らの精神に届き、その影響は身体に直接作用する。

もちろん、良い作用ばかりではないはずだ。悪霊に取り憑かれたり、宇宙的な力によって体の自由が奪われたりすることがあるかもしれない。いずれにせよ、自分の外に強力な精神的な力が存在し、自分はその力に直接さらされているという感覚こそが重要であった。

これに対し「緩衝材で覆われた自己」の場合、自分のまわりを、何かしら厚い「緩衝材」が覆っていることになる。その「緩衝材」のおかげで、自分は外界に直接さらされずに済んでいる。言い換えれば、外に対して「距離」をとることもできる。結果として、人間には境界線によって外界と隔てられた「内面」が形成され、その「内面」が自分にとってのあらゆる意味の源泉となるのである。

内面への撤退

これはまさしく、テイラーにとっての「近代的自己」の像なのであろう。しばしば抽象的に人間の内面性や自律性と呼ばれるものの背景に、ある種の身体性を含み、人間の内と外との関係をめぐる感覚の変質を読みとる点に、テイラーの議論のユニークさがある。

逆にいえば、政治学を含む近代の諸学問は、人間の内面性や自律性をあまりに自明視してきたのかもしれない。この前提の下では、人間にとっての意味や思考は、精神のなかにのみ存在することが当然視される。外界から隔てられ内面に閉じこもった個人が、自然的世界を統御していくというモデルも、「孔だらけの自己」から「緩衝材で覆われた自己」へという、近代における自己感覚の変質の産物として捉えられるだろう。

前章では、[※]経験について考えた。経験とは、その語源が示すように、「(向こうに行って)調べる、試す」ことを意味する。言い換えれば、いまいる場所から違う場所へと移動することが、その前提となっている。

これに対し、近代の「緩衝材で覆われた自己」とは、自らの内面に撤退し、そこから世界をうかがい、あるいは操作しようとする存在である。あらゆる意味は自らの内面からのみ生まれるのであって、自分の外部は統御すべき対象でしかない。

テイラーによれば、現代社会において、人々は「孔だらけの自己」にノスタルジーすら感じているという。なぜなら、厚い自分の壁のなかに閉じこもった自己にとって、世界とのより直接的な結びつきは、むしろあこがれの対象にもなるからである。

結果として、人々は映画館やパワースポットに行くなどして、あえて神秘的なもの、不可思議なもの、不気味なものを体験しようとする。それはあたかも、失われた感覚を取り戻し、恐怖に「震撼」することを望んでいるかのようである。

いずれにせよ、「緩衝材で覆われた自己」にとって、内に閉じこもって、外界のすべてを制御下に入れることが自律である。彼らは、外からの影響を断れば断つほど、自由になれる

と信じている。近代的個人は、世界から自分をより疎隔することの代償として、自由の感覚を得たといえるだろう。

いわゆる「世俗化」についても、テイラーはこのような自己イメージの変質によって説明する。彼はしばしば指摘される「世俗化」の定義を退ける。例えば、国家の公的な領域から宗教を排除するのが世俗化であるとか、宗教の影響力が後退していくことが世俗化であるといった理解を、テイラーは採用しない。

それではテイラーは、どのように世俗化を理解するのか。彼にいわせれば、そもそも、外界からの精神的影響を排除することのできない「孔だらけの自己」にとって、「不信仰」という選択肢は事実上存在しなかった。

これに対し、自分が外界から厚い障壁によって隔てられていると考える「緩衝材で覆われた自己」の場合、自らを超えたところに存在する価値の源泉を認めず、すべての意味は自分の内面にあると信じることも可能である。

そうだとすれば、「世俗化」とは、煎じ詰めれば、このような「不信仰」という選択肢があるかどうか、ということに等しい。一五〇〇年頃の西欧社会では、事実上そのような選択肢は存在しなかった。これに対し、現代社会では、「(自己を超えた価値の源泉を) 信じない」という選択は完全に社会的に承認されている。「世俗化」されているか否かとは、結局はその違いに還元されるとテイラーはいう。

内面と外面の分離

このようなテイラーの「世俗化」論の妥当性を、ここでこれ以上論じようとは思わない。ただ、「緩衝材で覆われた自己」とは歴史的に生み出された一つの装置であり、けっして時間を越えた自明の真理ではないという彼の洞察は、本書にとっても重要な意味をもつことを確認しておきたい。

というのも、近代の政治学はこのような自己の必要から生まれ、このような自己のあり方をその理論に組み込むことで発展してきたからである。もう少し説明しよう。

近代の政治学の出発点は、政治が宗教から自立したことにある。すでに述べたように、宗教内乱の結果、政治にとっての宗教は、自らを支えてくれる後ろ盾であるどころか、むしろ不安定化の原因になりかねない重荷となった。

このような局面において、政治にとっての負担を軽減するためには、政治を宗教から切り離すしかない。そこで打ち出されたのが、政治をもつば人間の外面に関わる事柄を扱うものとして限定する、という方向性であった。そのような意味での「政治の自立化」が、近代の最初のベクトルとなったのである。

政治の本質を實力や強制の契機に見出し、政治の道德からの自立を説いたニッコロ・マキアヴェリは、このような意味での「政治の自立化」をいち早く主張した理論家であるが、彼の同時代人に、宗教改革者であるマルティン・ルターがいたことはけっして偶然ではないはずだ。

表面的にみれば、マキアヴェリとルターとは、およそ異質な思想家に思える。とはいえ、結果からすれば、二人は、人間を内面と外面に分離できるという考えを強化する上で、ともに重要な役割をはたしたことになる。政治を人間の外面にのみ関わるものとしたのがマキアヴェリであるとすれば、宗教を人間の内面的事柄として純粋化したのがルターであった。その限りで、二人はまさにコインの表と裏であったともいえる。

逆にいえば、それ以前において、宗教とはけっして純粋に内面的な事柄ではなかった。宗教的儀礼を持ち出すまでもなく、宗教と身体性は不可分であった。また「魔術化された世界」において、人間の外部には、至るところに聖なるものの現れを見出すことができた。その意味で、信仰とはけっして「内面」の事柄ではなかったのである。

政治もまた、古代ギリシア以来、自由をはじめとする人間の内面的価値と不可分とされてきた。政治とはまさに人間性を開花させるためのものであり、内面的価値と切り離すことはできなかった。その意味からすれば、政治を純粋に實力や強制と結びつけて考えたマキアヴェリの方が、異端的であったのである。

とはいえ、「緩衝材で覆われた自己」の確立によって、人間の内と外が分断されることになり、それにともなつて、宗教と政治も分離されることになる。結果として生じたのが、政治の基礎の問い直しであった。というのも、宗教をはじめとする内面的諸価値から切り離されることで、政治は「やせこけた概念」になってしまったからである。

「十六世紀、十七世紀ぐらまでは平和の実現に政治の役割を限定することに意味があつた。ところが、成功して、平和が確実に実現されてしまうと、平和の実現のためにという政治の役割の意味自体が薄れてきて、自らの基盤が崩壊を始めるという話に逆になつてくる²」。政治にとって、目標を達成することによって自らの存立の目的が問われるという皮肉な事態が生じたのである。

個人の自然権によって政治社会の設立を正当化する社会契約論の登場も、このような文脈において理解することができるだろう。宗教などの内面的価値から切り離されることでやせこけてしまった政治の概念を、あらためて所有権を中核とする人権の理論によって意味づける必要が生じたのである。このことは、「政治の自立化」という最初のベクトルが、「人権に

よる正当化」という第二のベクトルによって補完されたことを意味する。

しかしながら、言うまでもなく、このような近代社会契約論もまた、「緩衝材で覆われた自己」と不可分なものであった。ジョン・ロックを参照するまでもなく、所有権の理論は「個人が自らの身体を自己所有する」という理解と不可分であった。自分の体は自分のものであって、他の誰のものでもない。それゆえ、自分の体は自分で好きなように処分できる。さらに、自分の体を使った労働によって生産したのも、自分の所有物となる。このような考え方が、所有権の理論を支えたのである。

ここにあるのは、自分の精神が自分の身体を所有し、排他的な処分権をもつという考え方である。さらに、その前提にあるのは、外部からの影響を断ち、自分の内面へと閉じこもった自己が、自らの身体を足がかりに、自分の外にあるものを所有の対象として捉え直しているという志向であった。

所有権の理論とは、このような志向を正当化するものであり、ひいては所有権理論に立脚する近代社会契約論もまた、このような新たな自己イメージの産物であった。その意味で、「緩衝材で覆われた自己」とは、近代政治思想にとってきわめて重要な位置を占める要素であったといえるだろう。

とはいえ、近代政治思想のある種の行き詰まりが明らかになった今日、このような「緩衝材で覆われた自己」もまた再検討の対象にならざるをえない。

原注 1 佐々木毅『宗教と権力の政治』講談社、二〇〇三年、二三八頁。

2 佐々木『宗教と権力の政治』一三九―一四〇頁。

出題者注※ 前章のタイトルは「民主主義の経験」である。

令和4年度入学試験 小論文「出題意図」

(入試情報公開用)

行政政策学類 編入学及び学士入学

宇野重規『民主主義のつくり方』（筑摩書房，2013年）の一部を素材にして，読解力，論理的な文章構成力，表現力などを問う。

(1) 筆者が傍線部①のような状況が生じた背景をどのように説明しているのかについて，資料から読み取り、要約できるかを問うことで，受験者の読解力や論理的な文章構成力，表現力などを測る。

(2) 筆者が傍線部②をどのように説明しているのかについて，資料から読み取り，要約できるかを問うことで，受験者の読解力や論理的な文章構成力，表現力などを測る。

(3) 筆者の主張を的確に読み取ったうえで，筆者の主張に対する自分の意見を論理的に表現できるかを問うことにより，受験者の読解力や論理的な文章構成力，表現力などを測るとともに，政治や社会に対する受験者の関心や問題意識をみる。